

氏 名 (本籍)	劉 ^{りゅう} 雅 ^が 静 ^{せい} (中 国)
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5973 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本語の談話における「ダ」の意味機能の研究
主 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 砂 川 有里子
副 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 杉 本 武
副 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 沼 田 善 子
副 査	筑波大学准教授 佐々木 勲 人
副 査	麗澤大学教授 井 上 優

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語におけるいわゆるコピュラの「ダ」を対象として、談話分析および機能文法的な視点から、その機能を包括的に分析することを目的とする。

本論文では、文境界を超えた談話論レベルでの言語使用を分析する談話分析のアプローチにより、「ダ」に関わる多様な言語現象の背後にある文法を記述する。分析にあたって、総論にあたる第 3 章では、談話分析の手法を用いて断定のモダリティ機能の有無を検討することにより、「ダ」の諸機能および機能相互の関連性を解明する。第 4 章から第 7 章までの各論では、まず従来あまり指摘されていない「ダ」の命題代用機能、そして「ダ」名詞文の使用条件と「ダ」の断定のモダリティ機能について検討する。また、日本語だけを観察していたのでは気づかない「ダ」の意味機能の特質を究明するため、日中対照研究のアプローチを用いて、日本語の「ダ」と中国語の“是”の対応関係を考察し、一語名詞文における「ダ」の有無の違いや「ダ」と“是”が表す判断の内実の相違を解明するとともに、「判断」には発話時に認知した存在対象に関わる判断と発話時以前にすでに認知していた事物に関わる判断の別があることなどを明らかにする。

本論文は以下の 8 章から成る。

第 1 章「序論」では、本論文の研究目的や研究意義、研究方法等について述べる。

第 2 章「先行研究」では、コピュラか否か、辞か詞かといった従来の「ダ」に関する議論を概観し、名詞述語文やモダリティ研究との関連も述べた上で、先行研究の問題点を指摘しながら、本論文で行う議論との関連を示す。

第 3 章「日本語における「ダ」の意味機能」では、主文の文末や補文内、文や発話の冒頭、一語名詞文、文中の文節の後といった様々な位置に出現する「ダ」を取り上げ、日本語における「ダ」の意味機能を包括的に考察する。断定のモダリティ機能の有無と断定のモダリティ機能の具体的な内容を検討することによって、「ダ」には「命題表示機能」(「命題構成機能」または「命題代用機能」)、「命題に対する断定のモダリティ機能」、「伝達態度に関わる断定のモダリティ機能」の 3 つの機能があることを指摘する。また、これらの諸機能が「事態や事柄がその通りであると述べる」という「ダ」の本質的な意味に由来することを明らかにし、

「ダ」の機能間に関連性があることを主張する。

第4章「単独の「だよね」から見る「ダ」の命題代用機能」では、発話の冒頭で用いられる「冒頭のダ」の用法の中で出現頻度が高い「だよね」を取り上げ、談話における「ダ」の命題代用機能について論じる。「だよね」の用法を考察するとともに、「だよね」における「ダ」の機能に関して、相手の認識を「ダ」で代用する、話し手自身の認識を「ダ」で代用する、話し手と相手が一致した認識を「ダ」で代用するという3つの機能を持つことを明らかにする。

第5章「「ゼロ」名詞文との比較から見る「ダ」名詞文の使用実態」では、「ダ」の使用の有無の問題を取り上げ、友人同士の会話における「ダ」名詞文と「ゼロ」名詞文の用法の違いから、「ダ」の断定のモダリティ機能の性質を明らかにする。発話の指向性という観点から考察した結果、「ダ」名詞文は発話時に話し手の認識に何らかの変化が起きている場合や聞き手に情報を伝達すると同時に、何らかの発話意図をも伝えている場合に使われることを指摘し、「ダ」名詞文は想起、気付き・再認識、決意、評価、伝達といった用法を持つことを明らかにする。また、「ダ」名詞文と「ゼロ」名詞文の使い分けは「ダ」名詞文における「ダ」が持つ断定のモダリティ機能に起因することを主張する。

第6章「“是”との比較から見る一語名詞文における「ダ」の意味機能」は、日本語の存在認知一語名詞文「Nダ。」の談話機能、および「ダ」のモダリティ機能を、名詞のみを用いた存在認知一語名詞文「No。」および中国語の“是No。”との比較により明らかにする。存在認知一語名詞文「No。」は対象の存在認知そのものを述べる表現であるのに対して、「Nダ。」は発話時に認知した存在対象が何であるかという話し手の判断を述べる表現である。中国語の“是”と比較することによって、“是”は話し手が発話時以前にすでに認知していた事物に対して、「それは何であるか」の判断を下す場合にしか用いられないのに対して、「ダ」はこの種の判断の他に、話し手が発話時において初めて認知した事物に対して、「それが何であるか」の判断を下す場合にも用いられることを主張する。

第7章「「デハナイカ」と“不是…吗?”の用法・機能の比較」は、「ダ」と“是”の否定疑問形「デハナイカ」と“不是…吗?”の用法・機能の類似点と相違点、およびその背景について考察する。話し手の真偽判断の成立の有無を考察することによって、「デハナイカ」と“不是…吗?”は事柄に対する話し手の認識そのものを聞き手に認識させるか、それとも事柄に対する話し手の真偽判断を聞き手に認識させるかという点において機能が異なることを主張し、その相違が「ダ」と“是”の機能の違いに起因することを論じる。

第8章「結論」は、本論文のまとめと今後の課題について述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、従来「指定の助動詞」あるいは「断定の助動詞」と分類されていた日本語の「ダ」が、間投助詞的、終助詞的に用いられたり、接続詞の一部として現れたりする現象を取り上げ、「ダ」の持つ「命題表示機能」、「命題に対する断定のモダリティ機能」、「伝達態度に関わる断定のモダリティ機能」という3つの機能と、「事態や事柄がその通りであると述べる」という「ダ」の本質的な意味とを関連づけながら多様な「ダ」の用法を包括的に記述し、多様性の間に見られる関連性を明らかにすることを試みたスケールの大きい意欲的な研究である。

総論部分では上の二つの主張が説得的な形で提示されている。また、各論部分では、「ゼロ」名詞文（No.）と「ダ」名詞文（Nダ.）の比較、中国語の“是”と「ダ」の比較、“不是…吗?”と「デハナイカ」との比較など、「ダ」の諸側面を明確に浮かび上がらせることのできるアプローチを使い分け、それぞれ丹念な記述・分析を行っている。

このような複数のアプローチを使い分ける手法は、往々にして、それぞれの分析・考察の関連性が希薄に

なりがちだが、本論文は、「ダ」の本質的な意味に関する自身の主張と個々の用法における機能との関連を綿密に検討することにより、多様な機能の間に見られる相互の関連性を明らかにしている。この点に本論文の卓越した独創性が見いだされる。同時に、論文全体を通じて、一人の研究者が研究対象の性質に則して複数のアプローチを使い分けつつ、一定の見通しのもとで全体として統一性のある分析を行っていることは、著者の研究者としての力量の高さを明確に示している。

個々の分析と考察に関しては、モダリティ体系の中での位置づけに関して一部整合性に欠ける部分があること、「断定」「判断」などの基本概念について議論を深める余地を残していることなどが問題点として指摘できる。中国語との対照についても、“是”の一部の用法しか取り上げられていないことや、現象の記述に関してさらに検討すべき点が残されていることなどの問題がある。しかしながら、「ダ」の多様な用法の中から本質的な意味を抽出し、それを核として「ダ」の機能の多様性の間に見られる関連性を追求するという本論文の目的に関しては深い考察がなされており、本論文の成果は十分な水準に達したものであると認められる。これまであまり注目されてこなかった周辺の現象が「ダ」の本質的な意味の記述を行う重要な手がかりとなることを示している点も本論文の特筆すべき点である。中国語に関しても、本論文によって明らかにされた“是”の意味機能に関する特徴は、“是…的”構文や強調構文といった関連する中国語の構文研究に新たな視点を提供するものであり、今後の研究の発展が大いに期待できる。

平成 24 年 1 月 27 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。